

マゴイの種苗生産放流

久米 弘人

◆背景・目的

平成16年に琵琶湖で10万尾を超えるコイが斃死し、その殆どが野生型コイ（マゴイ）と考えられた。コイは底質の浄化や水草抑制等に役立つことが池中実験で確かめられている。琵琶湖でマゴイ資源が減少した今日、琵琶湖の底質を始めとする水環境の急激な悪化が危惧される。そこで、減少したマゴイ資源を早急に回復させるために、マゴイの種苗生産放流を行った。

◆成果の内容・特徴

- ・種苗の親魚にはミトコンドリアDNAを用いた判別により、野生型コイと判断されたものを用いた。
- ・採卵は平成17年6月30日に行い、60,200尾の孵化仔魚を得た。孵化から約40日間の初期生産については、生残率が49%で29,700尾を生産した。その後、1月まで屋外飼育池で飼育し、生残率が80%で23,700尾を生産した。
- ・平成18年1月20日に平均全長130mmのマゴイ種苗23,700尾を南湖に放流した。

◆成果の活用・留意点

- ・今後、マゴイ判別の方法についてはミトコンドリアDNAの判別に加えて、核DNAを用いた判別を行う必要がある。
- ・今後は放流したマゴイの成長等の追跡調査を行うとともに、マゴイ資源回復のために効率のよい放流方法を検討していく必要がある。